生活行動の実態からみたオープン・コモンの働きと適応性に関する考察

A STUDY ON THE USE AND ADAPTABILITY OF OPEN COMMON AS VIEWED FROM THE ACTUAL SITUATIONS OF LIVING ACTIVITIES

大橋 寿美子*¹, 小谷部 育子*², 高橋 鷹志*³

Sumiko OHASHI, Ikuko KOYABE and Takashi TAKAHASHI

This paper describes the use and adaptability of OC (Open Common) spaces, based on the analysis of actual situations of living activities. The results revealed the following:

- 1) A wide variety of activities were observed in OC spaces and OC spaces promoted the creation of habitation networks.
- 2) In addition to the inhabitants, OC space users included neighbors and an unspecified number of other people. Furthermore, habitation networks center on the activities of the inhabitants, although a wide range of variations existed depending on the situation.
- 3) OC spaces of the path/yard type had a role that enables the widest habitation network and could be flexibly adapted to situational changes.
- 4) OC spaces were adapting flexibly, and three types of OC space changes were observed (e.g. changes in the quality, dominate function, and physical area of the OC space).

Keywords : *Open common, living activity, Habitation network, Adaptability, nLDK*
オープン・コモン 生活行動 居住ネットワーク 適応性 nLDK

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

一連の本研究の目的は、多様な家族の生活スタイルに適応する居住ネットワークの形成のための、柔軟で開かれた住居計画の構築への示唆を提示することである。

少子高齢化、女性の社会進出、産業構造の変化は、生活スタイルを変化させ、nLDKという住居形式がモデルに想定していた「夫婦と子からなる子育て期の核家族」以外の単身者、高齢者夫婦、共働きの家族、選択した人との非血縁家族など多様な住み手の出現を促している。家族や生活スタイルの多様化により、住宅を拠点として、家族成員以外の人やサービスなどに家族機能の一部を依存する生活スタイルを支える、居住ネットワーク形成の必要性が高まっている。しかし、現実の住宅供給は核家族を対象としたnLDKの平面計画が中心であり、現在の家族の生活実態が必要とする空間構成とのずれが顕在化している。既稿^{注1)}では、これからの多様な家族の生活スタイルに対応し、自立した生活や子育て環境を生み出す居住ネットワーク^{注2)}（以下居住NT）の形成のための、柔軟で開かれたOpen Common^{注3)}が求められているとした仮説を立てた。その上で、Open Common（以下OC）をもつ住空間構成を類型化し、その構成モデルの実際の作品分析への適用を試みた。

本稿では、OC領域が実際に生活の中でどのように使われているのか、状況に応じた個人と集住体^{注4)}や身近な地域社会との関係に柔軟に適応する場となっているのか、ということについて検証を行う。具体的には、OC領域をもつ住宅設計が近年増えてきており、それらの空間特性の傾向を把握した上で、OC領域にみる生活行動の実態調査から、居住NT形成の様相を考察する。また、多様な生活行動

が行われる状況に対して、OC領域の質変化の実態を確認し、適応性について考察する。最終的にこれらの検討結果から、改めてnLDKが想定した機能分化や家族構成による室機能の設定と現在の生活実態との不適応の状況を明らかにすることで、既稿にて提示したOC領域をもつ構成モデルの有効性を確認する。

本論文に関連する住宅における生活行動および生活領域の実態について取り扱った研究には、生活行動圏における近隣交流の実態を明らかにした研究^{注5)}、住居内における行動と空間との対応関係を統計的データ解析により求めたもの^{注6)}、住機能の都市化に視点をあて都市の生活関連行為を利用した生活行動の実態把握を試みたもの^{注7)}、などがみられる。また住宅ではないが高齢者施設における生活領域の広がり^{注8)}を検討した研究がある。いずれも住宅内外にまたがった生活行動を取り扱うものではない。本研究では、前稿で論じた個人と社会との日常的なつながりが個人の自立を支えるという視点から、住宅を拠点として住宅内や住宅外、また内外にまたがるOC領域における生活行動を明らかにする。具体的には、住宅の内部と外部空間及び敷地周辺を対象とした屋外にあるOCについて、利用者の生活行動の実態から居住NTへのOCの働きかけやOC領域の状況変化への適応を明らかにするものである。

2. 研究方法と調査概要

近年、OCをもつ事例は建築家による住宅設計の中に徐々に現れてきている。そこで、まず近年のOC領域をもつ住宅設計にみる空間的な特徴について全体傾向を把握し、その後、了解を得た住宅について居住者へのヒアリング調査と観察調査からOCにおける生活行動や領

*¹ 日本女子大学大学院 博士課程後期・修士(家政学)*² 日本女子大学家政学部住居学科 教授・工博*³ 日本大学総合科学研究所 教授・工博

Doctor Course Student, Graduate Japan Women's University, M.H.E.

Prof., Japan Women's University, Dr. Eng.

Prof., Japan University Research Center, Dr. Eng.

域形成の実態を把握する。対象事例抽出方法や調査項目など調査概要は表1にまとめた。

3. OCをもつ住宅設計事例の特性

(1) 全体傾向調査にみる空間特徴

全体傾向調査は実態調査の予備調査として位置づけ、近年のOCをもつ事例の空間的傾向を以下の6点にまとめる。①OCをもつ事例件数は現状ではまだ少ないが近年は増加傾向にある(1995～00年30件、2001～03年62件/全掲載住宅数444件)。②設計者が住宅を拠点として個人と社会の接点を意図したOC領域に該当する空間は、リビングやキッチンなどの住宅内や、縁側や土間などの内外の中間領域、庭や敷地外の前面道路や路地までみられた(図1)。③構成領域の配列^{注1)}は8割が適応型(88/113 OC領域数^{注2)})で、中でも動線の選択性があるIV-Bが最も多い(53/113件、表3)。④住宅形態は戸建て、戸建て集合、小規模集合、などの小規模なものが多い。⑤OCの空間形状は被包含型、通り庭型、前庭型、包含型の4タイプに大きく分かれ、さらに細かくみると9タイプに分類できる^{注3)}。事例数は、オープン・クローズの中間に位置した「通り庭型」が最も多くみられた(表2)。⑥空間配列と空間形状をクロスした分析では、「IV-B×通り庭型」が最も多い(29/113件、表2)。

表1 調査概要

	調査A 全体傾向調査		調査B 実態調査	
	第1回	第2回・第3回	第1回	第2回
調査期間	2000年6～10月	2002年2～9月 / 03年10月	2000年8～9月	2002年6～8月
調査方法	図面・記事から読み取り調査		ヒアリング調査・観察調査	
事例抽出方法	1995～00年の建築関係の雑誌 ^{注4)} (住宅特集を中心に日経7+キタラー、住宅建築)に掲載された住宅作品のPLANと説明記事から、居住NT形成を意図しているもしくは既に形成されていると読み取れる ^{注5)} 事例		PLAN分析調査で抽出した事例の中から、設計者の了解を得ることができた事例	
調査対象事例	表2に○で表記した30事例		「宅」「宅Ⅱ」「野田の家」「熊取の家」「SQUARES」5事例 表2●にて表記 ヒアリング対象者数16人	
調査項目	・建築概要 設計者、所在地、主要用途、所有形態、面積関係、世帯数 ・空間配列 ・居住者の家族構成 ・OC領域(空間名称、空間形状) ・設計意図(キーワード)		・OC領域の観察調査 立地、外観、OC空間形状、OCに常設されている装置、後述状況、アプローチ動線 ・居住者を対象としたヒアリング調査項目 家族の属性(家族構成、職業、居住歴など)、入居動機(建設)、個人領域や共用領域での生活行為や使い、各領域へのアクセス動線、近隣との付き合い、地域生活について、開放意識について

図1
OCの空間名称の分類

表2 配列×OC領域形状

※ マス内の数字は該当するOC領域の件数 ○: 調査A第1回対象事例、丸無: 調査A第2.3回対象事例 ●: 調査B対象事例

OC形状		被包含型			通り庭型		前庭型	包含型	
配列	共用型	A	B	C	D	E	F	G	H
		III-A OC Pe PU OC	III-B OC Pe PU OC	IV-A OC Pe PU OC	IV-B OC Pe PU OC	IV-C OC Pe PU OC	IV-D OC Pe PU OC	IV-E OC Pe PU OC	IV-F OC Pe PU OC
適応型	選択性なし	○ITプラザ神山町 OSQUARES(ワルム) ODSFストリー	Double-L カセットオフィス ○エンターテインメント 住居	○Apartment(ワルム)● LOOP A ○湘南台の集合住宅(オナー) ○家族文化アパートメント	横ヶ谷の家(子)	○LOOP A ヒムロハウス ○西田邸(親世帯) G&G House	ホワイトボックス 野田の家(親世帯)● 町屋Project(前庭)●	界壁の家	羽根木の森(アリエ) ゆいまる ○小国S邸
	選択性有	Pleats		HAT		ココライフ庵			
適応型	選択性なし	OSQUARES(メジネット)● ○ヒマラヤ杉の家 ○ITプラザ神山町 ○黒山荘● ○八雲の家(中庭) ○保田産第一団地	RE1102(土間) 朝日町の家	○Apartment(ワルム)● メジネット● ○モモ バスターコート ○湘南台の集合住宅(賃貸部)	Theatrical House/町屋 Project● ○PARETE大田原 戸建てプロジェクト ○モモ コーハウス喜多見● White Cule 熱海のスタジオ	台形面の家	鹿島ハウス(前庭) RS1102(前庭) ○小村井の家 野田の家(子世帯)● 大塚の家 白のアイロン LUX-HIT HOUSE 調子のハウス		賢者の家 P-O-M ○Y-D-DETAIL ○小国S邸 ○羽根木の森 GALLERY NUDE ようい格子の家
	選択性有	GREEN FOREST	○木村邸 レス・プラス(LESS+) ユニット+向丘の家	武庫之荘の家 CH2 NN 妙本寺の家 ○湘南台の集合住宅(オナー) ○坂山の家	南川邸 横ヶ谷の家(親世帯) つなぎの家 与野の家 ○清和の家● BANANACOURT ○House/町屋Project● nkm/町屋Project● ○1+3 村の家 平田の家 屋久島の家 かてか 瑞州の住宅 上目黒の家 PARK HOUSE 707ハウス	米山邸 GAP SKIP 香根の家 ○須藤・天神町の家 西田邸(子世帯) ○井原の住宅 新州の住宅 鎌倉の家 上目黒の家 PARK HOUSE 707ハウス	不動寺の家 ハニカムコアハウス 八雲の家(前庭)● 美里の家 白のアイロン ユーグリッドハウス 大田邸コンプレックス 屋久島の家 アビタ戸築(編)●	S-HOUSE	アビタ戸築(2Fテラス) 壁のない家 元麻布の家● ○熊取の家●

表3 実態調査対象事例の概要と分析結果

事例名	設計者	所在地	主要用途 所有者形態	敷地面積 建築面積	OCの 名称	OC 空間形状	配列	住戸数 (世帯)	居住者の 属性	7リソグ 人数	7リソグ 対象者 属性の特徴	居住 年数	OC 生活行為	居住NT レベル	状況変化への 適応型
屯	大野正博 DON工房	東京都 北区	集合住宅 ／賃貸	306㎡ 149㎡	中庭	被包含 型C	IV-A	6	非血縁	3	38歳男独身専業主婦 27歳夫婦 会社員	6 3ヶ月	気配、移動、挨拶、立ち話 近所の子供遊び、食事会、	3	Pe+OC⇒OC
屯II	大野正博 DON工房	埼玉県 草加市	集合住宅 ／賃貸	403㎡ 201㎡	路地	通り庭型 D	IV-A	6	非血縁	3	31歳 専業主婦 34歳 専業主婦 59歳 主婦・パート	4 4 34	食材協同購入、育児サポート、挨拶、 立ち話、井戸端会議、お茶、食事、 接客、気配、移動、子供の遊び、 新聞、喫煙、ガーデニング	3	OC+OC⇒OC
野田の家	WIZ ARCHITECTS ／吉井康晴	大阪府 泉南郡 熊取町	2世帯住宅 ／持家	66㎡ 45㎡	ワークスペース、 前庭	前庭型F	III-A(兼) IV-A(子)	2	血縁 (親子)	3	64歳母近隣と仕事 39歳夫 会社員 34歳妻 専業主婦	40 25 3	移動、仕事、子供の遊び、挨拶、 立ち話、井戸端会議、ガーデニング、	4	Pe+OC⇒OC
熊取の家	WIZ ARCHITECTS ／吉井康晴	大阪府 泉南郡 熊取町	専用住宅 ／持家	710㎡ 83㎡	文庫室、庭	包含型I	IV-B	1	核家族	1	33歳 司書・主婦	6	文庫室、教室、子供の遊び、宿泊 庭・子供の遊び、景色を眺める 移動、挨拶、立ち話	4	変化無
上高田の 集合住宅 SQUARES	谷内田章夫 ／ワークショップ	東京都 中野区	共同住宅 ／賃貸	881㎡ 524㎡	中庭、屋上、 アルコーブ	被包含 型A	IV-A	29	非血縁	6	20歳台1人、30歳台5人 ／大学生(単身者)、主婦、 建築設計、不動産業、会社 役員	5	中庭・挨拶、気配、立ち話、子供の遊び、 掃除、屋上、食事、お茶、ガーデニング アルコーブ・食事会、喫煙、立ち話、ガー デニング	3	OC⇒OC
八雲の家	阿部勤 ／アルファ 建築研究所	東京都 目黒区	専用住宅 ／賃貸	165㎡ 115㎡	前庭、キャ リ、 中庭	被包含+ 前庭型 C+F	IV-B	2	血縁 (親子)	1	56歳妻 キャリ-経営	3	前庭・気配、眺める挨拶、立ち話 中庭・移動、景色を眺める、気配 挨拶、立ち話 キャリ-仕事、展示会、	3	変化無
Apartment 傳	泉輔 研究所	東京都 中野区	集合住宅 ／賃貸	10800㎡ 501㎡	中庭、7フロ ア、カテ	被包含 型C	IV-A、 III-A	21	非血縁 (オーナー)	1	55歳 妻オーナー	30	中庭・7フロア・移動、気配、仕事、景色 を眺める、挨拶、ガーデニング、犬子供遊 び場、掃除、カフェ・仕事	5	OC⇒OC
泰山館	泉輔 研究所	東京都 目黒区	集合住宅 ／賃貸	2345㎡ 1099㎡	中庭	被包含 型C	IV-A、 III-A	34 1(オーナー)	非血縁	1	65歳 妻オーナー	10	中庭・挨拶、移動、気配、立ち話、食事 会、ガーデニング	2	OC⇒OC
浦和の家	アトリエエ ／資本益之	埼玉県 浦和市	集合住宅 ／賃貸	307㎡ 158㎡	通り庭 多目的室	通り庭型 D	IV-B	3	血縁 (親子 兄弟)	5	74、73歳 両親無職 42、42歳夫婦設計 42歳男専業主婦	67、30 8、8	通り庭・気配、移動、挨拶、立ち話、ガ ーデニング、子供の遊び、食事会、多目 的室・宿泊、食事会、仕事	3	OC⇒OC
コーハウ ス喜多見	片山和俊・ DIK設計室	東京都 世田谷区	集合住宅 ／賃貸	924㎡ 527㎡	ホール、 地のひろば、 天のひろば	通り庭型 D	IV-A	14	非血縁	8	60、54、54、55、52、 34、33歳・4世帯夫婦 妻全て専業主婦	4	挨拶、立ち話、食事会、お茶、お酒、井 戸端会議、看護、掃除、映画会、子供 の遊び、ガーデニング	3	OC⇒OC
C House ／町家Project Theory House ／町家Project aka / 町家Project	入江純一 ／powerUnitStudio 丸山洋志 ／丸山洋志 丸山洋志 ／丸山洋志	東京都 荒川区	専用住宅 ／持家 専用住宅 ／持家 専用住宅 ／持家 専用住宅 ／持家	116㎡ 67㎡ 118㎡ 43㎡ 100㎡ 51㎡	庭・道 ／ リビング (C House)	通り庭 型D	IV-B IV-A IV-B	1 1 2	血縁 (親子 兄弟)	1 1 1	42歳妻(長女)専業主婦 39歳妻 (次女)学生・主婦 68歳母親専業主婦	25 25 45	C Houseリビング：食事会、お茶、お 酒、井戸端会議、 庭・道・移動、気配、住宅を眺める、パ ー、立ち話、ガーデニング、掃除	3	OC⇒OC
アビタ 戸景	更田邦彦 ／岩間電夫 ／岩下優三	埼玉県 宇都宮市	戸建て 共同住宅 ／賃貸	845㎡ 401㎡	オープンテラス、 前庭、中庭、 テラス	1F前庭型 F 2F被 包含I	IV-B	4	非血縁	6	41歳夫婦：会社員・薬剤師 32、33歳夫婦：設計・会社員 36、39歳：会社員・専業主婦	2	食事、お茶、挨拶、立ち話、食事会、 ガーデニング、気配、移動	3	OC⇒OC
元麻布 の家	早草雄志 ／セルフスペース ／アーキテクト	東京都 港区	専用住宅 ／戸建て 持家	62㎡ 37㎡	玄関、車庫	包含型I	IV-B	1	核家族	1	52歳 妻専業主婦	不明	食事会、	3	OC⇒OC
梶ヶ谷 の家	石田信男 設計事務所	川崎市 高津区	専用住宅 ／戸建て 持家	220㎡ 132㎡	土間、予備室	通り庭型 D	IV-B	2 (将来)	核家族 得家(親 子)	2	74、68歳 会社員、専業主婦	8ヶ月 20	井戸端会議、食事会、気配、移動、 予備室：稽古、ガーデニング	2	OC⇒OC

4. オープン・コモンでの生活行動と居住ネットワークの広がり

既稿^{注1)}にて、OC領域があることで生まれる居住NTの働きを「個人の自立を支える」「交流を生む」「憩い」「生きがい」に分類したが、その具体的な行為項目^{注14)}を示した(表4)。

①「個人の自立」を支える 外部からのサービスや相互扶助の場が確保されることで、家族以外の人々が家事・育児・介護を一部担うことが容易になり、自立した生活を保障する。また仕事の関係者との接客行為も自立した生活につながる。

②「交流」を生む 内外を緩やかにつなぎ、外部に対する連続性や開放性をもつことで、個人の集住体間また個人の集住体以外の人にも共用領域として認識され種々の交流を生む場となる。

③「憩い」 今までプライベートな空間で行われてきた行為が開放的なOpen Commonに進出し、生活のゆとりを生む場となる。またほっとできる帰属意識を生む場となり、愛着に結びつく。

④「生きがい」 ボランティアなどの社会活動や趣味など自己表現や確認の場となる。積極的な社会活動の場や帰属意識を生む場となる。

事例ごとにOC領域での実際の生活行為について調査分析結果を表3にまとめた。事例の中から、OC領域で多様な生活行為がみられた6事例の平面図に実際の生活行為を記入した(図2〜6 次頁以降)。

(1) 生活行為別人数

OC領域で行われていた生活行為の全体的な傾向をみる。調査対象者本人がOC領域で行っている行為およびその人が目撃した行為について7リソグ調査を行い、行為別に人数をカウントした(表4)^{注15)}。その結果、OC領域では多様な行為が行われていることがわかった。居住NTの働き項目別では「交流」が最も多くみられ、OCでみられる

表4 OC領域にみる生活行為別人数

行為別数 行為項目		行為頻度数 1 2 3 4 5					単位：人数	
		1	2	3	4	5		
個人の自立		52						
家事	共同調理	8						
	外部サービス受	0						
	食料共同購入	6						
	共同掃除	11						
	合計	25	0	3	5	0	0	0
育児	共同保育	0						
	外部サービス受ける	0						
	育児サポート受ける	8						
	遊びさせる	8						
	合計	16	0	0	0	0	0	0
介護・看護	共同で介護	0						
	サポートする	7						
	外部サービス受ける	0						
	合計	7	0	0	0	0	0	0
仕事	共同で分担	1						
	打合・販売	3						
	合計	4	1	0	0	0	0	0
交流		232						
会話	挨拶	33						
	立ち話	26						
	井戸端会議	9						
	相談	8						
	合計	76	33	0	0	0	0	0
食事	食事	22						
	お茶を飲む	21						
	お酒を飲む	5						
	合計	48	0	7	13	2	0	0
接客	会を開く	25						
	教室を開く	3						
	その他宿泊など	8						
	遊び	10						
	移動	30						
	合計	36	0	0	5	20	0	0
憩い	思考	1						
	睡眠	0						
	休養・くつろぎ	50						
	お茶・酒(個人)	6						
	ぼんやり・喫煙	22						
	新聞・雑誌読む	2						
	景色を眺める	20						
	合計	51	1	0	0	0	0	0
生きがい	ガーデニング	18						
	ペットの世話など	4						
	学習	1						
	教える	0						
	社会参加(町内会民生委員)	4						
	合計	27	10	8	0	0	0	0
合計		362	175	97	55	34	1	1

※行為頻度は頻度1〜5に分け、頻度ごとに行為数をカウントした。
頻度1：ほぼ毎日、
頻度2：週1回程度、
頻度3：月1.2回程度、
頻度4：半年に1.2回程度、
頻度5：年に1.2回程度とした。

行為の過半数以上をしめている。次いで「個人の自立」「憩い」と続き、「生きがい」に関する行為は若干しかみられない。また現状では家事、育児、介護に関する「外部サービスの利用」はみられない。さらに行為別にみると、挨拶や立ち話などの「会話」が最も多く、「休養・くつろぎ」、お茶なども含めた「食事」、「気配」、「接客」「移動（すれ違い）」の順に続く。このように現状での居住NTの働きは「交流」が最も多く「個人の自立」はあまりみられないが「交流」は相互理解の原点であり、必要に応じて相互扶助を生み「個人の自立」を支えあう居住NTに発展していくことが予想される。

また、日常生活行為が居住NTの形成を促す重要な要素となるため、行為ごとに頻度^(注16)をみた。頻度1、2を日常的行為、頻度3、4、5を非日常行為としてみると、日常的項目が7.5割と大半をしめている。特に行為数が多かった項目の頻度をみると「挨拶」「移動」「気配」はほぼ毎日、「家事」「育児」「休養・くつろぎ」「趣味」は毎日もしくは週1、2回と、日常的に行われている。「食事」は頻度にばらつきがみられる。「接客」の中でも人が集まる会などは半年に1.2回程度が多く、非日常的行為といえる。このように生活行為別人数が多い項目は総じて行為頻度も高く、日常生活行為であった。

(2) 居住NTの広がりレベルと生活行動

OCでの生活行為をOCの利用者別に分析することで、居住NTの広がりや生活行動を明らかにする。事例ごとの調査結果は表3に記した。

<居住NTの広がりレベル>

居住NTの広がりをOCの利用者によって示すこととする。利用者は、居住者の集住体のメンバー、居住者の友人、近隣の人、通りすがりの人など不特定多数の人までみられ、利用者の組み合わせによって居住NTのレベルを5つに分類した^(注17)(表5)。つまりレベル1～5へと、個人から集住体という枠をこえて同じ住宅の居住者へ、さらにその友人、近隣の人、不特定多数の人へと初ワークが広がっていく。居住NTのレベルごとに、事例でみられた生活行為とOC領域の空間名称を表6にまとめた。OC領域の空間名称別にみると、室外の庭（中庭・前庭）で、もっとも多くの多様な行為が行われていた。

以下にレベルごとにOCにおける特徴的な生活行動を中心にとりあげる。

<レベル1：個人的行動>

個人で行う行動には、従来主に住宅内の個室で行われていた思考、ダイニングで行われていた食事、休養・くつろぎや移動という行為がみられる。このような、思考、休養・くつろぎといった個室やリビングなど住宅内や集住体内で行われていた行為が、居心地の良さからOC領域へと表出されてきている。中庭、玄関前のアルコーブ、屋上で個人的行動がみられ、行動を誘発する椅子、ベンチ、テーブルなどの装置が置かれている。これらの行為が最も多く見られるのは天気の良い休日で、平日でも仕事を終えた後くつろぐ姿がみられる。事例では被包含型の「SQUARES」図2、「屯」や通り庭型の「屯Ⅱ」図3、「浦和の家」図5でみられる。「SQUARES」「屯」では単身者が、「屯Ⅱ」「浦和の家」では集住体のメンバーが家族から離れて一人でくつろぐ姿が多くみられる。個人的行動は他者と直接関わりなく一人で行う行動だが、OCでの個人的行動が居住者間や近隣の人との挨拶や立ち話など自然発生的な交流を生み出すきっかけとなっていた。

表5 居住NTの広がりレベル

レベル	利用者
レベル1	居住者個人
レベル2	集住体のメンバー(複数)
レベル3	集住体のメンバー+友人+居住者
レベル4	集住体のメンバー+友人+居住者+近隣の人
レベル5	集住体のメンバー+友人+居住者+近隣の人+不特定多数

※ 集住体が一つの場合は居住者=集住体

表6 生活行為がみられるOC領域の空間名称(居住NT広がりレベル別)

OC領域の空間名称	室内	室内中間領域	室外	敷地外
	個室 キッチン ダイニング リビング 特別室(教室・店等)	土間 縁側 廊上 玄関前アルコーブ	庭 中庭・前庭	敷地と道の境界 敷地と道の境界 敷地と道の境界 敷地と道の境界
住生活行動	思考			
	休養・くつろぎ			
	趣味			
	食事			
	移動			
	ボランティア 社会参加活動			
	育児			
	家事			
	会話			
	接客			
居住者間行動	遊び			
	移動			
	気配			
	家事			
	仕事			
	会話			
	食事			
	遊び			
	移動			
	休養・くつろぎ

図2「SQUARES」生活行為

＜レベル2：集合的行動—集住体内行動＞

集住体内行動は、従来通りリビング、ダイニングで行なわれることが多く、OC領域でみられた行為は育児と食事の2行為のみであった。育児については、住宅内からも視線が届くOC領域で安心して日常的に子供を遊ばせる。さらに、遊んでいる姿をみかけた子供が遊びに加わるなど、子供間だけでなく親同士の交流を促し、レベル3や4へと発展していく様子がみられる。この行為がみられる具体的な空間名称は中庭や前庭、ワークスペースがある。また食事については、集住体のメンバーでバーベキューなどイベントとしての食事を行う姿が中庭や屋上などでみられる。このような行為がみられる事例は、育児は「屯Ⅱ」「野田の家」、食事は「泰山館」「SQUARES」であった。

＜レベル3：集合的行動—居住者間行動＞

集住体を超えて居住者間をつなぐ居住者間行動は、OC領域で最も多くみられる行動である。日常的行動と非日常的行動とに分けてみると、共同での調理は非日常的行動であるが、食材の分配、子供を遊ばせる、挨拶、立ち話、井戸端会議、移動、気配を感じるという行為は、日常的行為である。また食事は日常にも非日常にもみられる行為だが、親族複合居住では利用頻度が上がり日常的な行為である。このような居住者間行動は全ての事例でみられ、食事や調理はリビング、ダイニングキッチンや中庭で、食材の分配や育児、会話、気配については中庭、路地、土間でみられる。次に具体的に行為ごとに下記に記す。

・家事：掃除、共同調理、共同購入がみられる。掃除は当番や自主的にしているもの、共同調理は親族居住による一つのキッチンで共同で複数世帯の料理を行うもの、共同購入は居住者と近隣の人との生協などの食材の共同購入品の分配作業がみられる。

・子育て：住戸内から子供が遊んでいる様子がみえるので、親は安心して遊ばせることができる。また一緒に他の集住体の子供と遊ぶ機会が増え、子供達は遊んでいる傍らで親同士が子供の様子を見て会話をする光景もみられる。このようにレベル2の行動が居住者間のつながりを生んでいる。「浦和の家」では以前、営んでいた店で地域の子供を預かり、ちょっとした外出時や近所の共働き家族の為の託児所の役割を果たしていた。

・会話：レベル1の個人的行動の表出が、居住者間の挨拶や立ち話を自然発生的に生んでいる。特に空間装置としてのベンチや椅子のある「屯Ⅱ」「SQUARES」といった事例では、井戸端会議などの滞在時間が長い行為がみられる。

・食事：集住体内の食事と異なり、友人を呼んで、また居住者が集まって食事をする光景がみられる。親族複合居住ではより頻繁であるが、非血縁の居住者同士でも親しい友人世帯の集住である「コハウス喜多見」では、食事やお茶を飲む行為が日常的にみられる。いずれの事例の場合でも、一住戸のキッチンやダイニングをキーステーションとして開放し、キッチンやダイニングと中庭やアプローチなどが一体化してOC領域をなし、食事が行われる。

・気配：視線が届くか否かが気配を感じるか否かにかかわり、空間形状や構成材の素材が関係する。特にOC空間形状が被包含型や通り庭型でかつ開口部が広く視線が通る「屯」「SQUARES」「屯Ⅱ」「町屋Pro」「浦和の家」では、室内にいてもOC領域やその奥にある他の居住者の住戸の気配を適度に感じる。また「屯Ⅱ」では高齢単身者の安否をそれとなく気遣ったり、「町屋Pro」「浦和の家」では両親の

図3
「屯Ⅱ」
生活行為

図4
「町屋Project」
生活行為

図5
「浦和の家」
生活行為

図6
「野田の家」
生活行為

様子を気にかけることができている。居住者間の様子がなんとなくわかるだけでなく、視線が通ることによるセキュリティや安心感、帰属感につながっている。

・移動（動線の重なり）：日常の生活動線の重なりから、他の居住者と日常的に顔を合わせて挨拶するといった自然な交流が始まる。被包含型や通り庭型の事例では、居住者間の動線が重なり、交流が生まれやすい形状と言える。

＜レベル4：集合的行動—近隣者行動＞

居住者の居住歴が長いOC領域は、近隣の人の利用がみられる。中でも居住歴約40年の「野田の家」では、ミサの縫製の仕事を分業している近隣の仕事仲間の人が頻繁に出入りし、仕事の打合せや日常会話を行うなど、前庭とワークスペースが地域に開かれている。また、「町屋Chouse」のリビングでは近隣の親しい人が集まり、食事会やお茶会が行われる。「浦和の家」の中庭や多目的室では、レベル3でみられた居住者間による食事の場に通じかかった近隣の人が合流する光景もみられる。近隣の人との会話、家事、食材の共同購入などや子供が

遊ぶなどの行為はレベル3の居住者間行動の広がり行動である。

＜レベル5：個人的行動・集合的行動—不特定多数の人の行動＞

不特定多数の人の利用は、主に単独行動が中心で、郵便配達の人や水道検診の人などサービスを行う人、通りすがりの通行人などである。休憩行動がみられるのはベンチが常時設置されている「屯」「屯Ⅱ」などである。ガラス張り外部から住戸内部に視線が通る「町屋 Chouse」では、通行人が住宅を眺める姿がみられる。このような見知らぬ人の行動を住戸内から居住者が見ており、視線が行き届き日常生活動線上にOC領域が存在しているからこそ不特定多数の利用を許しているという関係が確認できた。

図7 居住NTレベル間行動の関係図

レベル1～5までの生活行動の実態を総合的にみると、レベル3の居住者間をつなぐNTがNTの中核をなしていた。OCの動線の重なりやOCの気配を住戸内から感じることで、個人的行動や集住体内行動の表出が居住者間NTを生み出す。またその安定した居住者間NTから生まれた行動の表出が、近隣の人たちとの接点となり、ネットワークの広がりをつくっていた。居住ネットワークレベル間の行動関係を図7にまとめた。

居住NT形成の流れを生活行動の実態から整理すると、「アクセス線の重なり」や「視線が通る」といった日常的生活行動は、「挨拶」や「立ち話」といった自然発生的な交流やセキュリティ機能を生み、緊急時の助け合いがみられ安心感や帰属意識につながっている。さらに現状では若干ではあるが、安心感や帰属意識をもった安定した関係が日常的な相互扶助を生み出していた。このように多様な行為を受け止めるOC領域をもつことによる居住NTの形成が確認できた。この居住NTの形成は、自立した生活や子育て環境を生み出す個人の自立の確立に発展していくことが予想される。

図8 居住ネットワーク形成の流れ

(4) 空間形状にみる居住NTの広がりの特徴

次に居住NTの広がりやOCの空間形状の関係をみる。空間形状によって居住NTの広がりや特徴があるだろうか。この2つの要素をクロスしたマトリクスに事例を落とした（表7）。表の事例名を記入した居住NTのレベルは生活行動が多くみられるNTの中核となるレベルで、状況に応じたレベル変化を点線で示した。つまり、点線が長いほど柔軟なOC領域で、状況による変化への適応性がみられる。また表は右下に向かって開放性が高いことを示している。

表7 空間形状にみる居住NTの広がり

居住NT広がり形状	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
被包含型	← 泰山館	← SQUARES 屯	← 八雲(中庭)		← 傳
通り庭型		← 梶ヶ谷	← 通和 町屋 屯Ⅱ	→	→
前庭型				野田	八雲(前庭)
包含型			アピタ戸塚	熊取(文庫室)	熊取(庭)

・被包含型：被包含型はOC領域を住戸がとり囲む形状で、閉鎖的な形状であるため、限定された居住者間での利用が本来適しているといえる。視線が常に住戸内から届き、玄関からのアクセス線が重なる「SQUARES」「屯」「泰山館」では、集住体内から居住者間行動が中心となっており、中庭に面した喫茶室が付随している「傳」以外は地域や不特定多数の人への広がりが見られない。

・通り庭型：最も多くの行為がみられた、柔軟に状況に適応する形状である。また被包含型同様、視線が常に住戸内から届き、玄関からのアクセス線が重なり、密接で安定的な親族世帯による居住者間行動がNTの中核である。この安定的なNTが、状況に応じて近隣の人、通りすがりの人までと、多様な利用者を許容し状況によるNTの広がりにつながっている。なお、「梶ヶ谷の家」では将来の複世代世帯を想定して作られているが現在は単世帯で居住のためレベル2が中心である。

・前庭型：事例ではレベル4と5がみられる。開放的である半面、柔軟な選択性は持ちにくい形状であるため、地域とのつながりを持ちやすいが、個人的行動や居住者間行動が行い難い。前庭型OCでは近隣との交流や相互扶助がみられる。

・包含型：OC領域が住宅を取り囲む最も開放的な形状であるが、居住NTは全てレベル5ではなく、居住者の開放意識によりレベル3～5とばらつきがみられる。また開放的な形状であるため、逆にレベル1,2の個人的行動や集住体内行動がみられ難い。レベル5の「熊取の家」では、塀がない郊外の広い庭が住宅を囲み、文庫室を地域の人へ、庭を不特定多数の人へ開放している。

空間形状タイプごとの居住NTの広がりについて特徴を総じてみると、通り庭型は居住NTの広がりや柔軟性がみられ、状況による変化への適応性がみられた。つまり、個人と他者との適度な距離感が築きやすい形状といえる。また、形状と居住NTの広がりやと概ね相関関係がみられ、オープンな形状ほど居住NTのレベルが高く広がりがみられた。

5. オープン・コモンに適応性

利用者の多様な行為にどのようにOC領域が適応しているのか、領域の質や広がりの変化について検討する。

調査結果から、特別室などOC領域の機能を限定し、質や広がりに変化がみられないもの（変化無）以外で、OCの領域変化を大きくくくると、①OC⇒OC（平常時とイベント時の変化）②CC⇒OC ③CC+OC⇒OC ④Pe+OC⇒OCの4つのパターンがみられた（表8）。表には、居住NTのレベルも明記し状況に応じたNTの広がり変化がわかるようにし

た。

<① OC⇒OC (平常時とイベント時の変化)>

OC 領域の領域自体の広がりには変化はないが、領域の使用者と使われ方が変化する。平常時は、居住者の個人的行動や集住体メンバー間の行動がみられる。対して目的がはっきりとした食事会などのイベント時には集住体メンバーと他の居住者や友人が利用者に加わり居住 NT が広がる。この場合の居住 NT の広がりに伴う領域の質の変化を可能としているものには、居住者間の安定した関係による居住 NT が形成されていることがベースにある。食事会などのイベントは月に一回程度みられるものが事例では多い。

<② CC⇒OC への変化>

①同様に OC 領域の領域自体の伸縮はないが、集住体の領域 CC が集住体以外の人利用可能な OC へと変化するものである。日常的に集住体のメンバーの友人や地域の人が集まってくる他者を受け入れる「町屋 Chouse」のリビングなど開放型の空間と集住体のメンバーの気質が、CC⇒OC への領域の質の変化を可能にしている。

<③ CC+OC⇒OC への変化>

個人の集住体の占有領域が接続する OC 領域と一体となり、全体が OC 領域へと変化する。CC の集住体メンバーの友人の来客時などにみられる変化である。事例では、中庭と一住戸の CC とが一体化して一つの OC 領域となるものがみられる。OC 領域と接続している領域であること、ベンチなどの装置が、行動が自然に表出されていく要因となっている。

<④ Pe+OC⇒OC への変化>

個人の領域 Pe と接続する OC 領域が一体となって OC 領域に変化する。事例では居住者間の NT の核となる単身者が居住者や友人を集めた食事会などを行う時に、食事準備のキーステーションとして自宅を開放している。また Pe が仕事場の場合は、一日の中で時間帯によって Pe から OC に変化する。日中は仕事の打ち合わせや仕事仲間との交流で常時 OC として開放され、仕事を終わると個人の領域 Pe となる。

③同様 OC 領域と接続している領域であること、ベンチなどの装置、と同時に Pe の占有者の個人のオープンな気質が変化を可能としている。

6. まとめ

現状では OC 領域をもつ事例はまだ少ないが、近年の OC をもつ建

築家による住宅設計の空間的特徴の全体傾向を把握した上で、Open Common をもつ住宅作品を対象として、生活行為の実態調査から OC の働きと状況変化への適応について分析した。その結果以下の 4 点が明確になった。

①OC 領域での生活行為は従来住宅内で行われていた行為を含めてそれ以外の多様な行為がみられ、OC 領域をもつことによる居住 NT の形成の可能性を確認した。現状では「交流」に関する活動が最も多くみられるが、居住 NT の形成は、自立した生活や子育て環境を生み出す個人の自立の確立に発展していくことが予想される。

②居住ネットワークの広がりには個人的行動から集住体間、居住者間や近隣者とのつながり行動、通りがかりの不定多数の人々のつながりまで確認できた。OC での NT の中核をなす居住者間の行動の表出が近隣の人たちとの繋がりを生み出し、NT が広がっていく。居住者間の NT が形成されていることで、安心感や帰属感が生まれ、近隣の人や不定多数の人の利用を許容し、OC 領域が開かれていく。

③OC 領域に該当する場所は住宅外部の庭だけでなく、住宅内空間から内外に渡る中間領域、敷地内の住宅外部、敷地外までがみられた。OC 領域の通り庭型の空間形状は、OC 領域や他の住戸の気配が適度に伝わり、かつ前面道路からも OC 領域に視線が通るために、最も居住 NT の広がりがあり柔軟に状況変化に適応する形式であった。

④多様な状況に適応するためにみられる OC 領域の変化は、質の変化によるもの、領域の機能が移行するもの、物理的に領域が広がり別の領域と合わさるものなどがみられ、平常時とイベント時や利用者によって柔軟に変化していた。

このように、住宅内外の OC 領域で日常的な個人と他者をつなぐ多様な居住 NT と広がりが見られ、その状態により領域が形成されている実態は、nLDK が想定した住宅内の機能分化による室の機能や核家族生活像とは異なった様相を示していた。本稿の結果により、既稿にて提示した OC 領域をもつ住居構成モデルの有効性を確認した。

今後は本稿の OC 領域の実態を踏まえて、OC 領域が機能し居住ネットワークの形成を育む、多様な家族に開かれていくための物理的要因や人的要因（居住者属性）などについて検討し、Open Common の構造を明らかにする予定である。

表 8 事例にみる OC 領域の状況による領域変化パターン

※レベルは居住 NT の広がりを記したもの

	変化 有					変化 無し	
	OC⇒OC (平常時とイベント時の変化)		CC⇒OC	CC+OC⇒OC	Pe+OC⇒OC	OC⇒OC	
特徴的な事例にみる変化	・SQUARES 中庭 屋上 玄関前アルコーブ		・町屋 CC:LDK OC:LDK+通り庭	・屯Ⅱ CC:中庭 OC:LDK	・屯 CC:中庭 OC:LDK	・八雲の家 OC:前庭・ギャラリ-・中庭	
	中庭:動線池で遊ぶ 気配を感じる 玄関前:新聞を読む 食事をする くつろぐ 屋上:景色を眺める 布団を干す		・集住体の食事・団らん ・TVをみる ・くつろぐ	・近所の人とのお茶 ・親族の食事会 ・友人のお茶 ・通行人が外から眺める	・友人との食事会 ・LDKで食事会 ・ベンチでお酒を飲む ・ベンチで会話をする	・動線・休憩 ・気配を感じる ・近所の子供が遊ぶ ・居住者と友人との食事会 ・個室で料理を居住者とつくる ・食事、お酒を飲む ・ベンチで話さむ	
	レベル1*2	レベル3	レベル1*2	レベル3*4	レベル2	レベル3	レベル5
	SQUARES コーハウス喜多見	浦和の家 泰山館 傳	町屋 アビタ戸景 梶ヶ谷の家 元麻布の家	屯Ⅱ	屯	野田の家	熊取の家 八雲の家

なお本研究は筆者が大和ハウス工業株式会社が在職時に行った、旧通産省 生活価値創造住宅開発プロジェクト「ライフスタイルの変化に関する研究」の研究成果をもとに、発展させたものである。

注

注 1) 参考文献 1) 参照

注 2) 参考文献 1) にて、「居住ネットワークとは、住宅を拠点とした居住領域での、個人を核とした選択的な共同性から生まれるソーシャル・ネットワークである」と定義した。またネットワーク居住との違いは、親族との関係だけでなく、友人や近隣の人さらに都市的なサービスと個人との選択的な関係を取り扱うところにある。

注 3) 参考文献 1) にて「Open Common とは、個人と個人、個人と地域社会との接点となる、個の集住体以外の人が利用可能な開かれた共用空間である。」と定義した。具体的には、日常の生活での自然発生的な交流やサービスをスムーズに住室内の個人の領域へ導入する、個人の領域と敷地外の道路をつなぐ日常の生活動線上の領域である。

注 4) 参考文献 1) にて「個人の集住体」とは、同じ住宅（住戸）に住む集団を意味し、本論では血縁による核家族やいわゆる擬似家族や非血縁による家族も含めて「個人の集住体」と定義した。

注 5) 参考文献 9) 10) 11) 12) 参照

注 6) 参考文献 13) 14) 15) 参照

注 7) 参考文献 16) 17) 18) 参照

注 8) 参考文献 19) 参照

注 9) 1995～2000 年の住宅特集を中心に日経アーキテクチャー、住宅建築を対象とし、2001、02、03 年は住宅特集に掲載された建築家の全住宅作品を対象とした。1995～2000 年は住宅特集だけでは OC 事例が少なかったため、3 つの建築関係の雑誌を対象とした。

注 10) 抽出した事例は Personal Territory と Public Territory の間に OC 領域が存在すること、さらに実際に設計者が個人を核とした選択的な関係づくりを念頭においた設計意図が記事の内容に書かれているもの、もしくは実際に既に関係がみられると書かれているものを抽出した。

注 11) 参考文献 1) にて、居住空間の構成領域を Personal Territory (Pe), Closed Common (CC), Open Common (OC), Public Territory (Pu) とした。構成領域の組み合わせ 4 タイプ（依存型、自足型、共用型、適応型）と動線の選択性の有無により、Pe から Pu までの構成領域のつながりによる 7 つの配列タイプを提案した。

注 12) 複数の OC をもつ事例がみられることから、事例数は 92 だが、OC 領域の数は 113 である。

注 13) 参考文献 20) では、外部空間と建物の配列を包含、隣接、被包含に分けている。本稿では、OC 領域の空間形状を参考文献 20) の外部空間にみたて、隣接を前庭型と通り庭型とにわけ 4 つの形状タイプによる空間形状の傾向をみる。

注 14) 参考文献 1) にて、社会生活基本調査の生活行為分類項目から居住ネットワークの働きに該当する生活行為を抽出した。「気配を感じる」は社会生活基本調査項目にはないが、なにげない交流をうながし適度な距離を保つ行為、として追加した。「交際・つきあい」については、さらに具体的に「会話」「食事」「接客」「遊び」に分類した。

注 15) ヒアリング調査対象者 44 人が OC 領域で行っている生活行為や目撃行為について、行為項目別にカウントした。カウント方法は対象者ごとに「その行為を行った」「その行為を見かけた」と答えた行為についてそれぞれ 1 とカウントし、その合計人数を生活行為別数とする。但し、目撃した行為については、同じ事例において複数の人が同じ行為を目撃した場合は 1 としてカウントした。

注 16) 行われている行為が、何日置きに行われているのかを行為頻度としてみる。例えば、表 4 内の「共同調理」は 3 人の人が週一回、5 人の人が月に 1.2 回行っていることを示す。

注 17) 各レベルは、ある状況においての利用者を示したものである。レベル 1 なら個人のみの利用、レベル 5 の場合は個人から不特定多数の人が一緒に利用している居住 NT の状況をしめしている。

参考文献

- 大橋寿美子、小谷部育子、高橋鷹志他：オープン・コモンをもつ住空間の構成行為の考察、日本建築学会計画系論文集、第 577 号、pp. 17-23, 2004. 3
- 大橋寿美子、高橋鷹志：これからの家族と住宅の移行 ―住宅提案にみられる生活・空間類型の分析から―、日本建築学会技術報告集第 8 号、pp. 163-168, 1999. 6
- 篠原聡子、大橋寿美子、小泉雅生：変わる家族と変わる住まい、彰国社 2002
- 大橋寿美子、高橋鷹志他：これからの家族と住宅の移行 ―これからの家族像の設定―、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp. 263-264, 1999. 9
- 大橋寿美子、高橋鷹志他：これからの家族と住宅の移行 ―住宅事例にみる開かれた共用空間の考察― その 1 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp. 83-84, 2001. 9
- 大橋寿美子、小谷部育子：これからの家族と住宅の移行に関する研究 住宅事例にみる開かれた共用空間の考察 その 2 日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2 分冊、pp. 7-8, 2002. 8
- 秋葉康則、大橋寿美子他：生活価値の変化に伴う新しい住要求に関する研究 その 1 その 2 その 3 日本建築学会大会学術講演梗概 E-2 分冊、pp. 155-160, 1998. 9
- 塩野禎隆、大橋寿美子他：生活価値の変化に伴う新しい住要求に関する研究 その 4 日本建築学会大会学術講演梗概 E-2 分冊、pp. 257-258, 1999. 9
- 小林秀樹：集住のなわばり学、彰国社、1992
- 小林秀樹、鈴木成文：集合住宅における共用領域の形成に関する研究―その 1 共有領域の構造―、日本建築学会論文報告集、第 307 号、pp. 102-111, 1981. 9
- 小林秀樹、鈴木成文：集合住宅における共用領域の形成に関する研究―その 2 建築形態の影響―、日本建築学会論文報告集、第 319 号、pp. 121-131, 1982. 9
- 小林秀樹：現代住居における場の支配形態―住居における生活領域に関する研究― その 1、日本建築学会論文報告集、第 468 号、P. 65, 1995. 2
- 山崎さゆり、高橋公子：時間量による生活の類型化―生活時間からみた行動と滞留空間の対応関係に関する研究― その 1―日本建築学会計画系論文集、第 491 号、pp. 67-74, 1997. 1
- 山崎さゆり、高橋公子：行動類型と空間類型の対応関係―生活時間からみた行動と滞留空間の対応関係に関する研究― その 2―日本建築学会計画系論文集、第 504 号、pp. 111-118, 1998. 2
- 山崎さゆり、高橋公子：生活時間のタイプ別事例分析―生活時間からみた行動と滞留空間の対応関係に関する研究― その 3―日本建築学会計画系論文集、第 538 号、pp. 61-68, 2000. 12
- 永峰麻衣子、小谷部育子他：「現代東京人」の居場所について ―都市単身居住者の環境行動に関する研究― 日本建築学会大会学術講演梗概、E-1 分冊、p. 1061, 1999 年
- 永峰麻衣子、西出和彦他：東京における生活領域に関する考察 ―都市単身居住者の環境行動に関する研究― その 2 日本建築学会大会学術講演梗概、E-2 分冊、p. 37, 2001 年
- 永峰麻衣子、西出和彦他：住居を中心とした行動環境と勤労タイプにおける生活形成様態について都市単身居住者の環境行動に関する研究 その 3 E-2 分冊、p. 289, 2003 年
- 橋 弘志、外山 義他：個室型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究日本建築学会計画系論文集、第 500 号、pp. 133, 1997. 10
- 日本建築学会編：建築設計資料集成 総合編、丸善、2001, pp. 248
- 住環境の計画編集委員会編：住環境の計画 2 住宅を計画する、彰国社 2002, pp. 28

(2004 年 6 月 9 日原稿受理、2004 年 10 月 13 日採用決定)